

宰府画報

第 10 号
2022 年 1 月
(令和 4 年)

発行
太宰府市教育委員会
文化財課



バックナンバーはこちらから

調査見聞

『江海風帆録』について

小倉と大坂間の案内記

今回は太宰府の絵師齋藤秋圃の作品として本市から遠く離れた愛知県西尾市岩瀬文庫所蔵の『江海風帆録』を紹介いたします。

『江海風帆録』は上下2冊、豊前小倉から大坂天満橋に至る各地の名所旧跡を本文と挿絵で紹介する海路案内記です。もともと宝永元年（1704）の序文を持ち、福岡藩士吉田重昌らによる文章のみからなる『江海風帆草』（全3巻）という地誌があり、そ



図1 『江海風帆録』上巻「陰陽石図」(西尾市岩瀬文庫所蔵)



図2 《綾部八幡宮社参図》部分



図3 《大里浜図》



ウラ オモテ

図4 『江海風帆録』上巻4丁目
(西尾市岩瀬文庫所蔵)

風俗図には、秋圃の絵の特徴がよく表れています。

『江海風帆録』の書き損じ？

齋藤家資料には『江海風帆録』の本文と挿絵そのままの内容をもつ画稿が遺されています。『大里浜図』(図3)は『江海風帆録』の上巻4丁目(図4)と一致しており、本文の末尾の行が欠けていることから、書き損じないし下書きに当たると考えられます。同じような資料が齋藤家資料中に数点確認されます。

これら直接的な証拠以外にも、齋藤家資料中に『江海風帆録』の挿絵と酷似する画稿があり、挿絵の多くは秋圃筆と認めてよいと思います。詩賛や句賛(漢詩や俳諧の発句を絵の賛文としたもの)の作者には頼山陽や田口四軒といった秋圃と交流のある人物の名が確認され、『江海風帆録』の制作背景を考える上で示唆となっています。

みなさんのご家庭にも秋圃を始めとする太宰府の絵師の作品が眠っているかもしれません。本市では絵師の家に伝わる資料の整理とともに、太宰府およびその近辺に遺る太宰府の絵師の作品の情報を収集していますので、ぜひ情報をお寄せください。(朱雀信城)

メイショ メイブツ 【四王寺山】

大宰府政庁跡の北に聳える四王寺山は、古くここに大野城が築かれたことから、大野山大城山と呼ばれていました。

『太宰府廿四詠』(明治17年刊)は、吉嗣拜山の識語によると、父梅仙が描いた太宰府に遺る十二古物、十二勝区の図に、押山自身が題詩を添えて、それらの古物・勝区を世人に知らしめようとして公にした、と記しています。そのなかに十二古物のひとつとして「大城山焦米」が、十二勝区のひとつとして「大城山」が載せられています。古物「大城山焦米」では天正の乱、つまり岩屋城合戦で焼けた米が今でも遺っていると記し、また、勝区「大城山」では、城跡の荒廃したさまを「頭童齒豁人」(頭が禿げて歯が抜け落ちた老人の意)にたとえて詠じています。

四王寺山は、往時の大野城や岩屋城の遺跡があり、また林道も整備されていることから比較的簡便に登山ができる山として人々に親しまれています。(重松敏彦)



(上) 大宰府政庁跡から望む四王寺山

(右) 『太宰府廿四詠』大城山



逸品探訪

太宰府の絵師に関連する逸品・名品を紹介します

吉嗣梅仙作

【児島高德図絵馬】

『太平記』の忠臣を描く

児島高德は、南北朝時代前期に南朝方で活躍した武将です。鎌倉幕府討伐に失敗して隠岐に流されることとなった後醍醐天皇を救出すべく宿所に忍び込んだ高德が、それを果たせず、桜の幹に忠誠を誓う詞句を書いたという、軍記物語『太平記』の逸話で知られ、絵馬や浮世絵の画題にもしばしば登場します。縦185センチ、横80センチの、継ぎ目のない大きな一枚板の画面には、甲冑の上に蓑をまとった高德が、花咲く桜の木にまさに文字を書き付けている場面が描かれています。

息子拝山の賛

絵を描いたのは吉嗣梅仙。画を生業とした吉嗣家の初代です。画面向かって右下に「七十三翁 梅儼寫」と墨書され、明治22年（1889）に描かれたことがわかります（奉納は明治24年）。描線は伸びやかで安定感が



明治24年奉納 板地著色 筑紫野市 山家宝満宮所蔵

した神社には梅仙の絵馬が多数あり、その数は福岡県内だけで100点をこえます。20代から7代の終わりまで幅広い年代の作品があって、梅仙が絵馬師ながらに健筆を走らせていたことがわかります。（井形栄子）

あり、足首をキョツとすぼめて足先は大きく外に開くよ

うな緩急のつけ方など、齋藤秋圃に学んだことをうなづかせる表現も看取されます。さて、経年による劣化で判読しづらくなっています。画面左上には「一樹墨痕留十字千秋忠節説三郎 辛卯春晚題 一聯拝山左手」の墨書もあります。一本の木に刻まれた十字は、永遠に三郎（高德）の忠節を伝えるものだという意味の賛文は、梅仙の息子である拝山が記したものです。

梅仙と絵馬

本作品は、450年以上の歴史がある岩戸神楽で有名な、筑紫野市の山家宝満宮の拝殿に掲げられています。拝殿には他に《神宮皇后伝絵馬》（嘉永2年〔1849〕奉納）も掛かり、現在は別置されている《宝満宮普請図》（弘化2年〔1845〕奉納）など全部で7面の梅仙の絵馬が現存しています。筑紫野市、嘉麻市、飯塚市域を中心と

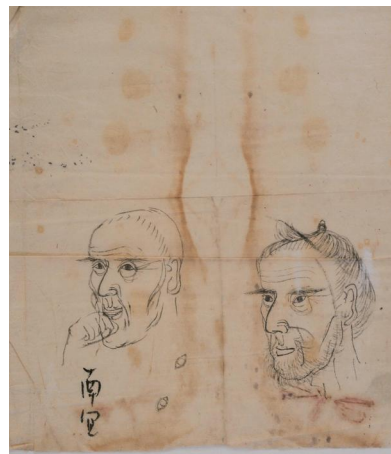


拝山の賛

賞 鑑 稿 画 齋藤家資料

【亀井南冥頭部】

瞳の大きな目、長い眉毛、削げた頬が印象的な、同一男性と思われる頭部が二つ描かれています。左は唇を開き、拳を口元に寄せ、目じりが下がった和らいだ表情、右は唇を結

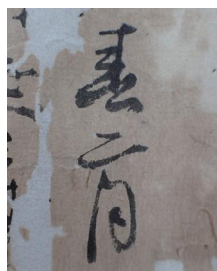


紙本墨画 / 24.5 × 21.8cm

ひとこと ぐずし字

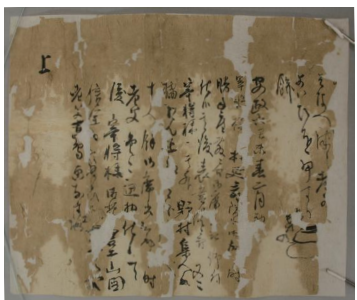
【春】

春がやってきました。まだ1月下旬の寒い季節ですが、旧暦では正月から3月までが春とされており、正月のことを新春と呼ぶのはこのためです。



今回ご紹介する字は、福岡藩主黒田長溥による延寿王院訪問の際、齋藤秋圃が画を描いたとする書付に書かれた「春」です。「三」と「人」がくっついたような上部は、ぐずし字では一画目を横に引いた後、二画目を縦に下ろし、その後横に三本線がひかれています。

び、目じりが上がった真剣な面持ちを呈しています。余白に両目の輪郭と瞳を抜き描きしています。全103紙からなる《人物図冊》に含まれるこの図は、秋圃が数多く手がけた人物写生の一例です。



《書付》安政6年（1859） 齋藤家資料

この男性は福岡藩の儒者亀井南冥（1743～1814）であることが墨書からわかります。南冥の肖像として有名な、白紙を前に筆硯と短刀を両脇に置いて端座する姿の著色画（福岡市博物館所蔵）とは異なり、墨線を引き重ねて顔貌が活写されています。

二人の間に交流があったことは南冥が着賛した秋圃筆《双鹿図》（文化2年〔1805〕、福岡市博物館所蔵）などから確認できます。南冥を秋圃がスケッチする間、どのような会話が交わされたのか、聞いてみたいものです。

（小林知美）